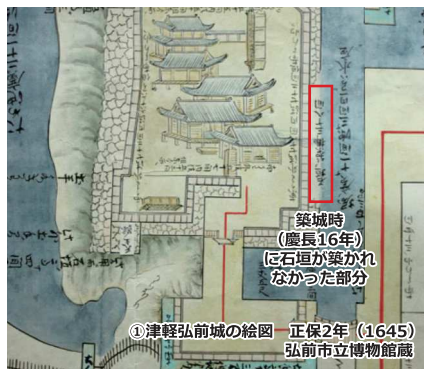


弘前城は、弘前藩初代藩主・津軽為信ためふにより築城が計画され、2代藩主信枚のぶひらの時代、慶長16年(1611)に完成しました。本丸・北の郭・二の丸・三の丸・四の丸・西の郭の6郭で構成された平山城で、規模は東西約500m、南北約1,000m、総面積約50haに及び、国の史跡に指定されています。濠は三方・三重に巡らされ、西側は蓮池と、元は岩木川の流路であった西濠に守られています。

築城当初の天守は五層であり、本丸南西隅に位置していましたが、寛永4年(1627)の落雷により焼失したと伝わっています。現在の天守は文化7年(1810)、9代藩主寧親やすちかが檜造やくらの名目で再建したもので、本丸南東隅に位置しています。日本に現存する12の天守のひとつに数えられており、5棟の城門・3棟の二の丸隅櫓とともに重要文化財に指定されています。

弘前城本丸東面石垣の歴史



弘前城では、主に本丸の周囲に石垣が積まれています。慶長16年(1611)築城時、本丸の石垣は一部分が築かれておらず、正保2年(1645)の絵図には「石垣ノ築掛三十八間」と記されています(図①)。この部分の石垣築造が始まるのは、築城から約80年後のことで、弘前藩4代藩主信政の時代です。

元禄7年(1694)5月、藩は石垣築造について幕府から許可を得て、7月に起工式である「御鋤初」を行っています。同年9月より本丸南西隅にある未申櫓台から普請(工事)を始め、翌年6月には本丸東面石垣の普請が本格化しますが、この年弘前藩は冷害による凶作から大飢饉となり、8月には普請を中断します。飢饉の影響も残る元禄12年(1699)3月に藩は本丸東面石垣普請を再開し、5月に石垣が完成しました。

当時、石垣に使う石材は岩木山麓より運搬しており、石材の採掘・割り出しをした作業場を「石切丁場」といいました。『弘前藩庁日記(国日記)』には、元禄の本丸東面石垣築造の際、如来瀬(弘前市)から切り出された石を牛車で運んだとの記録があります。如来瀬には、石切職人が石を切り分けるために付けた「矢穴」跡のある石が今でも残されています(写真②)。

元禄の石垣築造から約200年が経過した明治時代中頃、天守台付近で2度石垣が崩落します。明治29年(1896)の崩落後は、そのまま放置すると天守まで倒壊する危険性があったため、翌年に弘前市出身の大工棟梁・堀江佐吉が天守を西側に曳家しています。石垣が修復されたのは、曳家から18年後の大正4年(1915)のことでした(写真③)。

平成から令和の石垣修理

昭和58年(1983)5月の日本海中部地震を契機として、翌年から本丸東面石垣の定点観測を継続するとともに、平成12年度と15年度には「石垣概要診断調査」を実施しました。その結果、石垣の膨らみが明確となり、このまま変位が進行すると地震等の衝撃により、石垣が崩壊する危険性があるとの報告を受け「石垣修復計画」を策定し、平成19年度から地質調査・3次元測量・地下水位観測等の基礎調査に着手します。

平成20年度には、歴史・石垣・耐震等各分野の専門家て構成される「弘前城跡本丸石垣修理委員会」を組織し、基礎調査で得られた様々なデータをもとに検討を重ね、平成23年に石垣を解体修理する方針が決定しました。平成26年度より、実際の工事に着手しています。

◆修理範囲(東面)



◆修理範囲(南面)



本丸東面石垣の解体と発掘調査

平成29年4月9日より着手した弘前城本丸東面石垣の解体工事は、平成30年10月26日に最後の1石を取り外し、終了しました。解体する際には石材に番付けしており、最終的な解体石材数は2,185石です。石垣の解体中には、新たな発見がありました。



【井戸跡(写真④)】 井戸跡の掘方は直径約9mの楕円形をしており、東側に長さ約5m(4~8石)、高さ8m(11段)にわたる石組を伴っていました。東側の石組11段目付近の深さで、掘方中央部に二重の木製井戸枠が発見されました。木枠は正方形で、外側が一边1.7mほど、内側が一边1.2mほどです。外側の木枠と内側の木枠の間には砂が詰められており、壁から流入する泥水をろ過する働きがあったと考えられます。



【排水跡(写真⑤)】 排水跡は、石垣の中段に設けられた蛇口から、本丸での生活排水等を内濠へ流した施設です。蛇口背面の暗渠(地下水路)は石でつくられていました。暗渠の下部には元禄期の構造が残り、上部は19世紀以降につくり直されていました。



【埋没石垣(写真⑥)】 本丸東面の北側では、西側(本丸側)へ延びる石垣が見つかりました。この石垣は、自然石を積み上げた「野面積み」という積み方でつくられていました。元禄期の石垣より前につくられており、出土遺物や絵図等の史料より、17世紀中頃から寛文13年(1673)の間に築かれた石垣と考えられます。



【桐木と内濠石垣(写真⑦)】 石垣の沈下を防ぐ目的で、石垣下部に据える木材のことを「桐木」と言います。弘前城本丸石垣においても、発掘調査で桐木が確認されています。桐木は一边24cm程度の角材で、樹種はヒノキ科アスナロ属とクリです。また、天守台東面下の内濠では、石垣の前面に巨石を用いた低い石垣(写真⑦)が確認されました。これは本丸南東隅の櫓台下を補強するため、築城時に設けられたものと考えられます。